

修士論文

「本物」の日常言語哲学  
—ズボン語とは何だったのか—

2023 年度

京都大学大学院 人間・環境学研究科

伊藤 迅亮

# 論文内容の要旨

共生人間学専攻 伊藤迅亮

本論文は、日常言語哲学の立場から、本物であるとはどのようなことなのかを論ずる。日常言語学派の中心人物の一人である J・L・オースティンは、「本物の (real)」という語に対して「ズボン語」という特徴づけを指摘した。本論文の目的は、この特徴づけを明確化しつつ解釈し直すことで、〈本物とは何か〉という問いに答えを与えることである。

第 1 章では、オースティンがズボン語という特徴づけを導入した『センスとセンシビリア』第 7 節の議論を概説する。これによって、「本物の」という語が具える 4 つの特徴づけ——名詞欲求型・ズボン語・次元語・調整語——と、オースティンの日常言語哲学的アプローチの特徴を素描する。

第 2 章では、『センスとセンシビリア』第 7 節で導入された 4 つの特徴づけを吟味する。この吟味を通して、これら 4 つの特徴づけのうちズボン語こそが、他の 3 つの特徴づけやその他の用法を派生的に説明できるという意味で、そして、オースティンの哲学全体においても重要な位置を占めているという意味で、最も中核的な特徴づけであることを明らかにする。

第 3 章では、本物とは何でないのかを論ずる。「本物の」はズボン語であるということの解釈として、「逆転説」と「余剰説」を提示する。この両説は、現代の分析哲学においてほとんど自明視されている〈意味論が語用論に対して先立つ〉という想定に則った意味論的な解釈である。そして、この両説は共にいくつかの難点を抱えていることを指摘する。

第 4 章では、本物とは何であるのかを論ずる。L・ウィトゲンシュタインの『確実性の問題』を参照しながら、第 3 章で示した意味論的な解釈に代わる、より妥当な解釈を提示する。この解釈は、意味論的な解釈とは反対に、〈語用論が意味論に対して先立つ〉と考える語用論的な解釈である。それから、この語用論的解釈が、従来の日常言語哲学に差し向けられてきた批判をどのように回避するのかを説明する。

私たちが提供しているのは、実のところ、人間の自然誌に関する考察である。ただしそれは、好奇心を刺激するような物珍しい事柄ではない。誰にも疑われたことがなく、いつもすぐ目の前にあるばかりに見過ごされてきた事実なのである。

——ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『哲学探究』§415

# 「本物」の日常言語哲学——ズボン語とは何だったのか

## 目次

序 .....	2
第1章　メイク・センス・オブ・『センスとセンシビリア』 .....	5
第1節　なぜ『センスとセンシビリア』第7節なのか .....	5
第2節　「本物の」の一般性と特殊性 .....	7
第3節　哲学者の「本物の」の使用——批判的プロジェクト .....	8
第4節　「本物の」の4つの特徴づけ——構築的プロジェクト .....	11
第1章のまとめ .....	17
第2章　「本物の」を整理する——ズボン語という核 .....	19
第1節　名詞欲求型の吟味 .....	19
第2節　次元語の吟味 .....	24
第3節　調整語の吟味 .....	27
第4節　ズボン語の吟味——予備的考察 .....	29
第2章のまとめ .....	35
第3章　ズボン語とは何でないのか——表象主義の誤謬 .....	37
第1節　素朴な意味論的解釈——「本物の」の逆転説 .....	37
第2節　逆転説が抱える難点 .....	39
第3節　洗練された意味論的解釈——「本物の」の余剰説 .....	42
第4節　余剰説が抱える難点 .....	45
第3章のまとめ .....	49
第4章　「本物の」がズボン語であるとは何だったのか .....	51
第1節　「知っている」の文法——ウイトゲンシュタイン『確実性の問題』 .....	52
第2節　語用論的解釈（1）——「知っている」と「本物の」の類似点 .....	54
第3節　語用論的解釈（2）——「知っている」と「本物の」の相違点 .....	59
第4節　日常言語哲学への反論と語用論的解釈からの応答 .....	62
第4章のまとめ .....	66
結 .....	68
参考文献 .....	71